第１５回　ちゅうでん教育振興助成（平成２７年度）

報告書資料　一般-６０

学校名・団体名	碧南市立大浜小学校
ＨＰアドレス	http://swa.hekinan.ed.jp/oohamael/
コ　ー　ス	学校支援
活動・研究 テ　ー　マ	伊号第２９潜水艦艦内誌「不朽」を電子書籍に復刻しよう

〈活動・研究の意義、目的〉

戦後７０年を迎え、戦争体験者の高齢化や社会情勢の影響もあり戦争と平和を語り継いでいくことが困難になっている。学区の民家から戦時中に撃沈された旧日本海軍の伊号第２９潜水艦の乗組員が文芸作品などを寄せた艦内誌「不朽」の創刊号が発見された。７０年前の太平洋戦争末期の貴重な未解明資料であり、乗組員は時代の波に翻弄されながら強い精神力で任務にあたり、立派な文章を残した。本校児童運営委員は劣化が進む艦内誌「不朽」の保存活動に乗り出し、全てを写真データにまとめた。写真データでは活字としては読み取れず活用が難しいため、５．６年生全児童一人ひとりが書き起こし、電子データ化することを通して、平和学習を進めた。復刻版「不朽」冊子と電子書籍データは全国の乗組員遺族や関係機関に送り届けられ平和発信の活動となった。

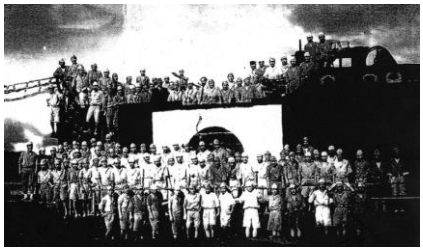
＜活動・研究報告＞（時期、内容、成果や子どもたちへの効果などを記入。A4 用紙 1～2 枚でおまとめください。）

１活動内容

（１）対象者　５年生（１２４名）　６年生（１１４名）

（２）教　科　総合的な学習の時間

（３）活動時期及び内容



伊号 29 潜水艦乗組員

戦争の悲惨さを知る　　２時間

４月２７日、３０日

・艦内誌「不朽」について知る授業の実施。

① 伊号第２９潜水艦艦内誌「不朽」が希少な史料であることを学習した。

② 伊号第２９潜水艦にインドの独立運動家スバス・チャンドラ・ボースが来日するために乗り込んだ史実や欧州からドイツのジェットエンジン等の航空技術資料を持ち帰る途中、フィリピン沖で米潜水艦の魚雷攻撃を受けて撃沈され、１００名余の乗組員の内１人を除き死亡した戦時を知った。戦死した乗組員は今も海底に取り残されている。戦争に生きた乗組員の人生、思い等を学ぶ目標を明確にした。

③ 伊号第２９潜水艦乗組員の遺族（地域講師）の話をお聞きした。

遺族は「兄は大阪出身で水雷長として同艦に乗船していたが、１９４４年７月２６日に日本への帰路、フィリピン沖で米軍の魚雷攻撃にあって１００人余りの乗組員と共に２４歳で戦死した。兄によくかわいがられ、よく遊びに連れて行ってもらった。潜水艦の仕組みも教えてくれた兄の帰宅が楽しみだった。」と、７０年前を振り返って話された。このことで、児童は戦争の事実を自身に引き寄せて考えるようになった。

艦内誌「不朽」

遺族の話

戦争遺物「不朽」を復刻する　　３時間

５月１３日～５月２９日

・艦内誌「不朽」を１人１５０文字程度分担し、書き起こした。

① 旧漢字・旧仮名遣いで難解な文章も多く、独特な言い回しが随所に見られた。乗組員遺族、海上自衛隊関係者、持ち主、歴史家等を招聘し、漢詩旧仮名遣い、くずし文字等の指導をしていただいた。各クラスに５～６人の教師も書き起し作業に加わり指導した。旧漢字・旧仮名遣い辞典や古文書辞典も活用し、読み取っていった。不鮮明で読めない文字は写真データを拡大して何度も読み返し、それでも読めない文字は×で記していくなど苦戦した。書き起し作業を終えて、艦内誌に書かれている戦争の事実をもっと知りたいという感想が多くみられた。「感動的な言葉や伊号２９潜水艦の過こくさなどがとてもよく分かります。・・・１２回も赤道を越えたことについても調べたいです」と、積極的に調べていく児童もいた。

② 書いてある内容から乗組員の思いを考える授業の実施。

③ コンピュータを使い、分担した文章を活字に変換した。コンピュータ補助員を招聘し入力等補助に当たってもらった。(コンピュータ講師招聘)その後、教師が一連に編集した。

艦内誌復元 遺族が助言

碧南・大浜小の平和教育

旧日本海軍の潜水艦で発行された艦内誌の復元を平和学習の一環として授業に取り入れている碧南市の大浜小学校で、乗組員の遺族らが児童の作業を手伝った。

艦内誌は伊号第二九潜水艦(伊29号)の「不朽」で、撃沈前の一九四三年(昭和十八)年に発行された創刊号が一冊、校区内の民家で昨春見つかった。

不朽は乗組員らが寄稿する文芸雑誌のような体裁で、論文や手記、詩歌などが掲載されている。見つかった一冊は傷みが目立ち、大浜小は内容を活字にして冊子にまとめることを決めた。

作業には五、六年生約二百四十人が関わっている。全百十ページを写真に撮り終え、その画像を基に内容を分担して書き出す工程に入っている。

二十七日にあった授業には、四四年に戦死した水雷長岡田文夫さん(享年二十五)の妹岡本時子さん(八三)=東浦町=ら遺族四人が参加し、岡田さんの人柄や当時の潜水艦業務などを紹介。内容を書き出す作業では、難読漢字に苦戦する児童らに助言した。

六年生の永坂勇樹君(一二)は「潜水艦の過酷な生活と乗組員の気持ちが分かった」と話した。岡本さんは「子どもたちは熱心に聞いてくれた。大変な時代があったことが少しでも伝わればいい」と目を細めた。(片山健生)

艦内誌の内容を書き出す児童を手伝う岡本さん(左ら=碧南市大浜小で

中日新聞記事 2015.4.28

６月１６日

・児童運営委員が電子データを校正し、コンピュータ講師の支援を受け、電子書籍と紙原稿に完成した。

その後、紙原稿を印刷製本し、復刻版「不朽」５００冊が完成した。

コンピュータで活字化

戦争とは何か、平和とは何かを考える　３時間

７月１３日

・艦内誌「不朽」復刻完成報告会の開催

乗組員５遺族、海上自衛隊関係者等を招聘し、５．６年生全員で復刻完成報告会を行った。遺族は「戦後７０年の節目に復刻版を作ってくれて感謝している。これからも平和な時代が続くよう努力してください」と児童に呼びかけた。

７月２６日

東海テレビが「ニュース One」の１０分間の特集制作で本校の取り組みを取り上げた。その中で、多くの児童が戦争や平和への自分の考えを語ることができた。ノンフィクション作家の藤井誠二さんには「戦の遺産である『不朽』には戦争賛美の文章が多い。子どもたちがその行間から戦争で死にたくない、戦争はおかしいといった考えを読み取っている学習・・・今後もこういった活動が重要」と高く評価して頂いた。

戦後70年

艦内誌 よみがえった

碧南・大浜小で復刻の報告会

旧日本海軍の潜水艦で編まれた艦内誌の復刻作業を進めていた碧南市の大浜小学校で十四日、完成報告会があった。地元の民家でぼろぼろの状態で見つかった艦内誌の内容は、児童たちの手で真新しい冊子に複製され、戦争の一端を次代に伝える資料となった。

艦内誌は、伊号第二九潜水艦（伊29号）の「不朽」で、乗組員らが寄稿する文芸雑誌のような体裁。撃沈される前の一九四三（昭和十八）年に発行された創刊号が一冊、校区内の民家で昨年三月に見つかり、平和学習の一環で五、六年生二百三十八人が今年四月から本格的に復刻に乗り出した。

作業は、表紙など散逸部分を除いた全百五ページを撮影した後、写真を基に児童らが計約三万二千六百字に及ぶ文面を書き出し、パソコンで活字化。原本と同じ大きさ、ページ数で冊子にした。並行して原本各ページの写真やレット端末などで読めるようデータ化した。

報告会には乗組員の遺族や原本の所有者らが七人を招き、児童らが復刻版を一冊ずつ手渡した。沈没で兄を亡くした大府市若草町の松波義数さん（八二）は一終戦から七十年の節目に、幻の艦内誌が復刻した。乗組員たちの尊い魂がよみがえった感じだ」と感謝した。

作業の中心となった児童運営委員長の六年榊原聖奈さん（一二）は「艦内誌には乗組員たちの気持ちが書かれ、過酷な時代だったと感じた。復刻版で多くの人に知ってもらえるのはうれしい」と話した。

復刻版は五日部副校長ら、全校児童に配って今後の平和学習で活用する。電子データはCDで希望者に譲る。（酒大浜小学校＝0566（41）0990）（片山健生）

↑復刻版を児童から受け取る遺族や原本所有者（右下）と復刻版（左下）。上は復刻版の内容＝いずれも碧南市の大浜小で

中日新聞 2015.7.14

全国に平和の「不朽」を発信する　　随時

８月

・広島県呉市海軍資料館「大和ミュージアム」にある「伊２９潜戦没者」碑等から遺族を調査。全国の伊号第２９潜水艦乗組員の遺族に艦内誌「不朽」の復刻版送付開始。

・書き起し活動の協力者(地域講師)へ復刻版「不朽」を送付した。

・ＮＨＫ番組「天使のアングル」の番組制作のために、５．６年生児童全員が戦争と平和についてのアンケートに答え、平和の大切さを発信した。

９月～１２月

・戦争と平和を考える展示会に本校の活動をパネル展示した。

・艦内誌「不朽」全体を読み、遺族からの手紙等から人が戦に生きるとはどういうことで、平和裏に生きるとはどういうことかについて考え話し合う授業を行った。

１１月～３月

・北海道から福岡在住の乗組員遺族の希望者に復刻版「不朽」４３冊を送付完了。

・復刻版「不朽」の電子書籍・紙冊子を防衛省や図書館、関西大学及び愛知教育大学教授等４０冊寄贈、広く戦史資料として活用できるよう送付。

・復刻版「不朽」を希望する歴史家、一般市民へ１１０冊送付し、平和発信活動を進めた。

不朽について話し合う

２　実践の成果

５・６年生全員で艦内誌「不朽」分担して書き起こし、電子データ化し電子書籍に復刻していくことを通して、戦地で極限状態にあった乗組員の現実を知り、戦争と平和について考えることのできる児童が育った。

児童は、艦内誌「不朽」の小説、短歌、川柳から乗組員の家族への思いや故郷を偲ぶ思いから平和裏に生きるとはどういうことかを考えるに至った。また、密命を果たしていた伊号第２９潜水艦の乗組員の遺族から話を聞き、平和についてさらに深く考えることができた。

一方、児童が、ＩＣＴを活用し艦内誌「不朽」を電子書籍と紙書籍に完成し発信することで、乗組員遺族及び社会一般に広く史料を提供する技能を獲得することとなった。特筆すべきこととして艦内誌を解読する過程で、「赤道神」の文章そのものが、観世流新作能「皇軍艦」の原作であったことを自ら突き止めることができた。歴史的な意義も大きい。

児童は多くの報道機関を通して、平和の尊さを語った。

知　三河　13版　2015年(平成27年)12月5日　土曜日　亨月

旧海軍艦内誌 能の原本

解読していた碧南・大浜小が突き止める

昨夏、碧南市の民家で発見された戦時中の潜水艦の艦内誌「不朽」創刊号。解読作業を進めていた碧南市立大浜小（金子てる子校長）が、この中に新作能「皇軍艦」の原作「赤道神」の原文があることを突き止めた。この能を題材に、4日の授業では、平和などを考えた。

赤道祭の様子。鬼を追えカギを持つ赤道神＝不朽から

創刊号は太平洋戦争中、工作員の移送などに当たった伊号第29潜水艦の乗組員による制作。戦闘や艦内の様子のほか、手記や俳句、詩歌などを掲載する。5年生は平和学習をテーマに複製本を製作し、内容の解読・分析に取り組んできた。

この中に謡曲「赤道神」があった。赤道を過ぎる際、船内で行われた赤道祭を物語風に仕立てたもので、名古屋の高校教諭からは「観世流能・皇軍艦の原本ではないか」との指摘があった。

戦史に詳しい関西大学の米田文孝教授への取材を進める中で、「赤道神」が観世流宗家により新作能「皇軍艦」として発表されたことや、1943年5月26日に東京・華族会館で公演されたことなどが分かったという。

戦中、観世流が新作で公演

この日の授業には、創刊号の持ち主杉浦秀延さん(56)も参加。杉浦心さん(11)は「戦争をしながら能を楽しむ心を大切にしていた。平和の芸術が復活してほしいと思っていたのでは」。別の児童は「自分たちのことを後世に残したかった」などと、乗務員たちの思いなどについて、意見を交わした。

授業を見学した相山女学園大学の飯塚意理人教授は「謡やレコードは残っているが、国威発揚の内容で戦後は上演されなかった。幻の能です」と話した。（森山龍男）

乗組員の思いを発表し合う児童ら＝碧南市立大浜小学校

7　長崎☆　2015年(平成27年)7月27日(月曜日)

へいわを伝える　戦後70年の教室　第2部（3）

乗組員の思い 書き起こす

愛知・碧南市大浜小

暗闇空母何ものぞ
我に必殺の魚雷あり

一生々しさが伝わってきた。その詩を初めて目にしたとき、愛知県碧南市大浜小六年生の榊原聖奈さんはそう思った。

昨年三月、地元の民家で見つかった伊号潜水艦の艦内誌「不朽」。乗組員が手掛けた詩歌や俳句、手記、創作文などが寄せられていた。乗組員に同校の卒業生と同じ名前があることも確認した。「これ書き起こした作品を電子はいい学習教材になる」。平和学習を長く続けてきた校長の金子てるえさんとは確信した。児童自身が手掛ければ、さらに学習が深まると。

艦内誌はB5判相当の謄写版刷り。五、六年生二百三十八人が一人二百字程度ずつ分担して書き起こした。旧仮名遣いで書かれ、児童にとって一行を読み解くにもひと苦労。書き起こしたものを、パソコンに打ち込んだ。

榊原さんら児童運営委員の六人が、最後の作業に取り掛かったのは今年六月下旬。準備から約2年。一年がかりで、ようやく完成した。電子書籍を作ってあるんだ。勇ましい言葉とは裏腹に、行間からは戦地に赴く不安がにじんだ。今は「戦地に行きたかったわけではない。家族のために自分を励ましていたんだ」と感じる。

今回の資料は道徳や社会、国語とさまざまな場面で活用できそうだ。希望者にはCDにして渡り、いずれは誰でも読める形での公開を検討する。

金子さんは「教材や思いは教師や後輩の子どもたちに受け継がれる。今後も教材をきっかけに、平和を考え、発信できる子どもになってほしい」と願っている。（長田真由美）

完成した電子書籍を見る児童運営委員の6年生＝愛知県碧南市大浜小で

「これならたくさんの人に読んでもらえそう」

さあ行かふよ七つの海へ
めざす敵艦沈めるまでは

石川さんが書き起こしたのも持ったた。「死ぬかもしれないという極限状態なのに、なぜ前向きでいられたんだろう」。そう心に残った。電子書籍であらためて読むと、行間からは戦地に赴く不安がにじんだ。今は「戦地に行きたかったわけではない。家族のために自分を励ましていたんだ」と感じる。

今回の資料は道徳や社会、国語とさまざまな場面で活用できそうだ。希望者にはCDにして渡り、いずれは誰でも読める形での公開を検討する。

金子さんは「教材や思いは教師や後輩の子どもたちに受け継がれる。今後も教材をきっかけに、平和を考え、発信できる子どもになってほしい」と願っている。（長田真由美）